

ハルシナイから上流へ⑩

明治十五年二月、開拓使が廃止。札幌・函館・根室の三県が設置されて、上川郡は札幌県の管轄となった。前回まで紹介してきた明治九年の松本十郎の『石狩十勝両河記行』は、開拓使時代の最後の貴重な記録となった。

例えば、松浦武四郎が安政四年（一八五七年）に宿泊した大番屋の跡を訪れ、板庫一棟がまだ残っていたこと、上川総乙名のクウチンコレ（クーチンコロの称が一般的）が、病で伏し、長男チャレンミナ、次男モシサヌが孝養を尽くしていること、その病の原因が有名な琴似又市の奸計と断罪するなどである。

特にハルシナイでの聞き書きは、明治初期の上川アイヌ社会を知る重要な資料となっている。標題は、「石狩並

二上川乙名、小使各村分轄支配で、紙幅の関係でここでは上川郡のみを掲載する。アイヌの役名の乙名は、コタ

ン集落の長で、小使は乙名の補佐役。総乙名はこれらの乙名・小使を統括する地域の首長を意味している。元来は、松前藩がアイヌ支配を貫徹するために、アイヌ社会の中に統治組織として編成した役アイヌであった。しかし、当時は自治的なもののように、石狩川筋の乙名が協力し、特に明治七年からは石狩川河口域での漁労収益の積み立て資本で、「米塩ノ欠乏アルコトナシ」と、松本十郎は称讃している。

松本十郎がハルシナイで記録した上川郡の役アイヌとその集落範囲は次の通りである。

- 一、上川 総乙名クウチンコレ
 - 小使ーレヌシハ
(但昨年十二月亡)
- 一、ツカフニヨリウシ、ベツ迄
 - 乙名ーシレアエノ
 - 小使ーカンナノミ
- 一、アサカフヨリビ、迄
 - 乙名ーニホンウンテ
 - 小使ーモノクテ
- 一、チウベツヨリハ、ツ迄
 - 乙名ーシリコフツネ

断章 旭川のアイヌ語地名研究

85 高橋 基

一、ナイボウ 乙名ーイナヲサン
さて、三県時代の上川調査の最初は、内田澁等の札幌・根室間の道路開削の適地調査である。内田澁は、札幌農学校の第一期生で、特にクラークに強い影響を受けた敬虔なクリスチャン。道庁時代には、殖民地撰定主任、また、鷹栖村の松平農場の管理者になるなど、上川との縁が深い。

内田澁は、札幌農学校卒業後は、開拓使に採用され、明治十四年九月に、十勝・北見・釧路の三方国を巡回し、札幌根室間道路開削ルート上の調査をした。翌十五年の調査は、同僚の田内捨六等が、五月十八日に札幌を出発、カムイコタンを経て、美瑛川から空知川

上流へ出て、空知川上流から十勝へ山越えして、約八十日を費やして根室に到着している(内田は東京での結婚式のため参加出来なかった)。

明治十五年の『札幌県勸業課第一年報』に、「日高十勝釧路根室北見諸州巡回復命書」を掲載。上川原野の開拓、また、上川から天塩等への交通路の視点から、十勝への道路をカムイコタン經由を提唱した。

なお、カムイコタンについては、次のように記述している。
「カムイコタンノ間一里許ハ巖石水底ニ突起シテ奔流彌急ニ、繩ヲ舟端ニ結ビ岸頭ヨリ之ヲ引クニ非ザレバ水上ニ漕ギ行ク能ハズ。此ヨリ上流猶小舟ヲ通シ得ル凡六日程ナリト云フ。然レドモ上川アイヌノ如キ能ク諳熟セルモノニ非ザレバ棹ヲ廻ラヌ能ハズ」



明治15年「札幌根室間道路線探討略図」(部分)

掲載図は、右の復命書に付された「札幌根室間道路線探討略図」(部分)で、原版はカラーである。上川の道路線案は、カムイコタンを通り、美瑛川沿いに空知川上流に描かれていて、復命書通りである。(アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第一週号に掲載します